

アミーゴ会だより

2025年10月
通巻第64号
季刊 2025-IV
www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：吉野 隆

メキシコ歴史文化講演会：2025年第1回

大航海時代にメキシコ・ラテンアメリカに渡った日本人 — 改宗ユダヤ人ディアスポラとの相関 —

東京大学史料編纂所
准教授 岡 美穂子

序論

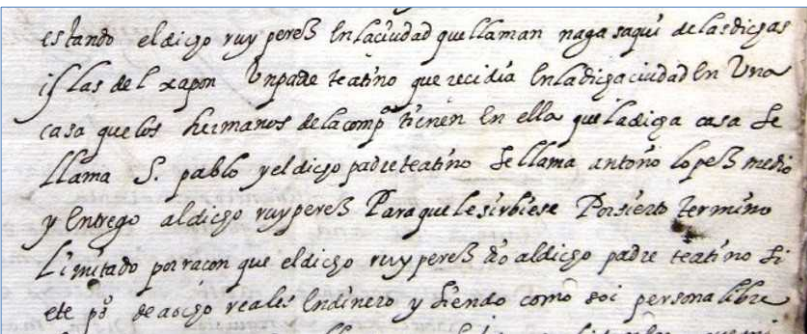
大航海時代は、ヨーロッパ諸国による海外進出と交易網の拡張によって特徴づけられる。しかし、この時代を単にスペインやポルトガルといった国家主体の拡張と征服の物語として理解するのは不十分である。実際に世界を結びつけたのは、征服者や国王のみならず、奴隷、商人、職人、改宗者、宣教師といった多様な人々であった。その中には日本人や新キリスト教徒（改宗ユダヤ人）も含まれている。彼らは一見「周縁的存在」と見なされがちであるが、実際には交易や文化交流の現場で重要な役割を果たしていた。本報告では、メキシコおよびラテンアメリカに到達した日本人と、同様に世界各地を移動した改宗ユダヤ人ディアスポラに注目する。両者の交錯を手掛かりとすることで、大航海時代のグローバル化がいかに多層的な担い手によって支えられていたのかを明らかにする。



日本人の海外展開

ペレス家奴隷ガスパール・フェルナンデス

日本人奴隷の最も詳細な事例として、長崎在住の新キリスト教徒ペレス家の奴隷であったガスパール・フェルナンデスの記録が挙げられる。豊後で生まれた彼は、わずか8歳のとき父親により人買いへ売られた。名目上は年季奉公であったが、実際には長崎でポルトガル人商人ルイ・ペレスに購入され、以後は我が子のように養育されつつ、ペレスと共にマニラを経てメキシコへ渡航した。ペレスはメキシコ・シティで異端審問にかけられる途上で船上死したため、主人を失ったフェルナンデスは自ら裁判を起し、奴隷身分の不当性を訴えて自由を勝ち取った。



↑フェルナンデスの証言

この事例は、日本人が新大陸社会において主体的に身分の転換を成し遂げ得たことを示すものである。こうした記録が残された背景には、スペイン領新大陸における裁判制度の整備と文書管理の徹底があった。

この事例は、日本人が新大陸社会において主体的に身分の転換を成し遂げ得たことを示すものである。こうした記録が残された背景には、スペイン領新大陸における裁判制度の整備と文書管理の徹底があった。

= 目次 =

1. 第1回講演会：「大航海時代にメキシコ・ラテンアメリカに渡った日本人」 東京大学史料編纂所 岡 美穂子...1
2. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ一人旅 16 トナンツイントラ（プエブラ州）」 会員 阿部修二 ...4
3. 上原尚剛名誉会長を偲ぶ：「上原尚剛さんを偲んで」 黒沼俊子・西 東亜子・遠藤滋哉・笠井道彦 ...8
4. お知らせ：「たばこと塩の博物館特別展 けむりと人々のつながり～メソアメリカの記憶～」 ...3
5. メキシコ短信：「黒沼ユリ子さんの平和の絵本 メキシコの子供たちに届く」 / あとがき ...10

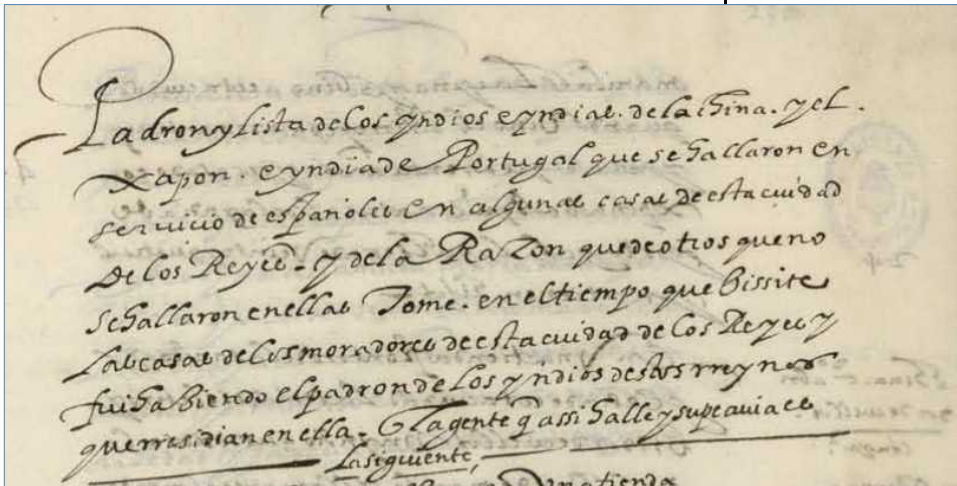
フランシスコ・ハボンとコルドバ

1595年、アルゼンチンのコルドバにおいてフランシスコ・ハボンという日本人の存在が確認される。彼もまた自身の自由を求めて訴訟を起こし、その過程で所有者が新キリスト教徒であることが明らかとなった。

所有者が改宗ユダヤ人であったことは単なる偶然ではない。コルドバはポトシ銀山とラプラタ河口を結ぶ交易路の要衝であり、多数のユダヤ系商人が活動する地域であった。すなわち、日本人と改宗ユダヤ人は交易の結節点において自然に交錯していたのである。

リマの日本人共同体

1614年のリマ住民台帳には20名の日本人が記録されている。その中には奴隷として登録された者もいれば、解放後に職人や商人として活動する者も存在した。リマは当時、ペルー副王領の中心都市であり、銀山からの富が集積する拠点であった。そこに日本人が定住したことは、彼らが単なる通過者ではなく、都市社会に組み込まれていた事実を物語る。



↑リマの住民台帳

慶長遣欧使節とメキシコ

慶長遣欧使節の随員の一部がメキシコに定住した事例も確認される。福地蔵人はその代表であり、現地女性と婚姻し、日本人の娘婿に財産を継承させた。この事例は、日本人が新大陸において一時的な滞在者ではなく、生活基盤を築いたことを示している。

国内外の背景

九州の戦乱と人身売買

戦国期の九州は島津氏・大友氏・龍造寺氏・有馬氏らの抗争により荒廃し、戦闘に伴う「乱取り」が横行した。捕虜や農民は人身売買の対象となり、長崎開港以降は国外市場へも流出した。

奴隷市場と国際需要

ポルトガル人はアジア各地で奴隷取引を展開し、日本人は肌の色が比較的明るいことから高値で取引された。彼らはマニラ、マカオを経由してメキシコやペルーにまで運ばれ、都市社会の労働力として

利用された。秀吉の朝鮮出兵以降、朝鮮人捕虜が市場に大量に流入したことで日本人奴隷の価格は下落したが、日本人が完全に姿を消したわけではなかった。フランシスコ・ハボンやフェルナンデスの事例が示すように、ユダヤ系ポルトガル商人による日本人所有は珍しくなかった。

改宗ユダヤ人の世界的展開

イベリア半島の異端審問

1492年のスペイン追放令と1536年のポルトガル異端審問所設立により、多数のユダヤ人が世界各地に離散した。カトリックに改宗した彼らは「マラーノ」や「コンベルソ」と呼ばれ、複数のアイデンティティを持ちながら活動を展開した。

ナッシ家の国際ネットワーク

ナッシ家はリスボン、アントワープ、ヴェネツィア、イスタンブルと拠点を移しつつ、地中海から大西洋に至る広大な商業網を構築した。特にグラシア・ナッシとその娘婿ヨセフ・ナッシはオスマン帝国の庇護を受け、宮廷で重用されるとともに東地中海交易を主導した。彼らの代理人はアジアにも派遣され、マカオや長崎でその活動が確認されている。

カルバハル家とメキシコ

メキシコではカルバハル家があり、有名である。彼らはタスコ銀山経営に関与し、都市社会の発展に寄与した。近年発見されたカルバハル家由来の地下ミクヴェは、表向きカトリックを装いながらユダヤ教を密かに実践していた可能性を示すものであり、ディアスポラにおける文化的連続性を裏付ける証左といえる。

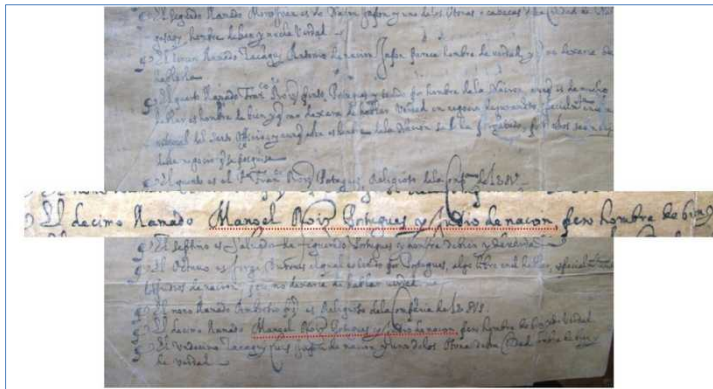
航海術と知識の継承

改宗ユダヤ人は航海術・天文学・地図学においても顕著な貢献を果たした。ポルトガルの海外進出を支えた航海学者の多くがユダヤ系であり、彼らの知識なくして大航海時代の展開は困難であった。江戸初期に書かれた『元和航海記』にも、新キリスト教徒であったポルトガル人マヌエル・ゴンサルヴェスの関与が記されている。

長崎在住新キリスト教徒の活動

16世紀末から17世紀初頭にかけて、長崎を拠点とするポルトガル商人たちは日本＝フィリピン交易を担った。中でもマヌエル・ロドリゲスは平戸町に居住し、口之津を拠点として活発な交易を展開した。彼は朱印状を受けた正式な朱印船貿易商人であったが、その背後には国際的なコンベルソ・ネットワークが存在した。彼は南米のマヌエル・デ・ラ・グアルディアの代理人として活動し、カルバハル家やディアス・カセレスらと連携して大西洋を跨ぐ人脈を築いた。近年タスコで発見された地下ミクヴェは、迫害下においてもユダヤ教信仰を保持した人々

存在を示す重要な遺構である。



↑長崎在住のユダヤ人ロドリゲス

結論

以上の事例が示すように、日本人と改宗ユダヤ人はアジアからラテンアメリカに至る広大な交易網の中で交錯していた。ガスパール・フェルナンデスやフランシスコ・ハポンの裁判記録、リマやメキシコにおける定住、日本とタスコを結ぶ銀山技術交流の要請などは、その象徴的事例である。大航海時代のグローバル化は、征服者や王権のみならず、周縁とみなされる人々の能動的な活動によって支えられていたのである。(了)



↑世界地図の中の日本 1561年
ユダヤ人地図学者バルトロメウが作成

【講師略歴：1998年大阪外国語大学(現大阪大学)卒業、京都大学大学院を経て2003年より東京大学史料編纂所に奉職。『日本関係海外史料 イエズ会日本書翰集』を編纂。人間・環境学博士(2006年、京都大学)。著書に『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』(東京大学出版会、2010年)、*The Namban Trade* (Brill、2021年)等。ポルトガル、スペイン、イタリア等に約4年在外研修滞在】

2025年メキシコ歴史文化講演会(全3回)

「大航海時代の日本とメキシコの関係」

日本人とメキシコ(ヌエバ・エスパーニャ)との16世紀の関係につき、日本人奴隷渡航、秀吉政権および家康政権の外交政策をテーマに、講演会を全3回開催しました。各講師には主要論点や追加論点をご寄稿いただき順次掲載します。会場はメキシコ大使館別館5階。

○第1回(7月3日)「大航海時代にメキシコ・ラテンアメリカに渡った日本人」

講師：岡 美穂子氏(東京大学史料編纂所准教授)

○第2回(7月24日)「大航海時代の日本とメキシコ ①ヌエバ・エスパーニャ(メキシコ)副王府の東アジア進出と秀吉政権との関係」

講師：柳沼孝一郎氏(神田外語大学名誉教授)

○第3回(8月7日)「大航海時代の日本とメキシコ ②徳川家康幕府とメキシコ副王府の関係」

講師：柳沼孝一郎氏(神田外語大学名誉教授)

お知らせ たばこと塩の博物館特別展

『けむりと人々のつながり』

～メソアメリカの記憶～

たばこと塩の博物館(東京都墨田区)では12月21日(日)まで特別展「けむりと人々のつながり～メソアメリカの記憶～」を開催中です。

「本展では、現在のメキシコ周辺地域を中心に、古代と現代の人々とけむりの関係に焦点をあてます。館蔵資料の中から、古代の人々が残した器や喫煙具、現代社会を生きる人々とけむりに関する道具など約70点の資料を展示し、メソアメリカの人々とけむりにまつわる文化の一端を紹介します。」



特別展サポートキャラクター

特別展 URL([現在の特別展「けむりと人々のつながり～メソアメリカの記憶」特別展 | たばこと塩の博物館](https://www.tabashio.jp/index.html))によると(以下要旨)、「中南米地域はたばこのふるさと。植物としてのたばこもアンデス山中で誕生。アメリカ大陸各地の人々がさまざまな用途・方法で利用。特に古代メソアメリカにはパイプや喫煙の様子が描かれた土器など、たばこに関する資料が残る。」

「たばこはその地の人々が信仰する神々への供物、あるいは儀式的道具として使用され、喫煙時に生じるけむりは天上界の神々と地上界の人間との間で神託や願いなどを運ぶ役割を担い、香炉で焚かれた香のけむりもまた儀式に不可欠で浄化や将来を見通すなどの役割を担う。古代の人々の行いは現代にも引き継がれ、先住民文化が息づく地域では今も人々が祭壇にたばこを供えたり、儀礼の中でたばこや香のけむりを発生させたりする場面がみらる。」

☆開館時間：午前10時～午後5時。最終入館は16:30。

☆入館料：大人300円。月曜日休館。

☆詳細：<https://www.tabashio.jp/index.html>

“けむり”の神秘を考える好機です。お薦めです。

ぶらりメキシコ人旅
 —「なんだあ？これは！」：トナンツィントラ=プエブラ州—
 (Tonantzintla)

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
 写真家・ルポライター 阿部修二

はじめに

前回紹介したアカテペック村からイダルゴ通りを歩いて10分ほどの所に、トナンツィントラ村がある。辺りは畑が広がる農村地帯で、集落はあるが村の核となるソカロ（中央広場）や商店街と言うものは見られない。村人が集まれるのは私が長いこと詣でたいと願っていたサンタ・マリア教会前の狭い広場だ。でもそこには村役場などの主要な建物は見られない。

トナンツィントラという地名で思い出すのは、メキシコ市北部のグアダルーペの聖母が出現したと言われているトナンツィンの丘、今はグアダルーペ聖母信仰のメッカと言うべき大聖堂のその先にある丘である。セリート礼拝堂が建っている辺り、あるいは正にその場所にトナンツィンを祀るピラミッドがあったと言われている。グアダルーペの聖母がメキシコ先住人の前に出現したのはこの地でのことだと言われている。残念ながら今回はその物語を詳述することは紙面の都合上かなわない。でも聖母出現が先の丘で起きたとされているのは、このトナンツィンのピラミッドと関係があるからのようなのだ。と言うのもトナンツィンは先住民の『我々の母』としてあがめられていた女神だったからだ。



サンタ・マリア教会外観

前で祈祷をしていた。日本でもよく見かける神社での風景だが、煉瓦の壁で覆われた教会の中に大型の車は入れないから牧師が外に出てきたのだろう。この力士のような巨大なトラックの所有者が誰なのか見当も付かないうちにお祓いは終わってしまった。集まった人にキャンディのような振る舞いなどがあるかと期待していたがそれもない。彼らはこの新車の持ち主の親戚かあるいは

話をトナンツィントラ村に戻そう。その地名からすれば、サンタ・マリア教会のある場所は、先のトナンツィン『我々の母』が祀られていたピラミッドのあった所だと想像する。村人は、あるいはこの辺りの布教活動をしていたフランシスコ会の修道士達は、トナンツィン『我々の母』と関係づけて教会名を聖母、つまりサンタ・マリア教会としたのではないだろうか強く思う。もちろん今日我々が見ることのできる教会ではなく、被征服直後に村人にあてがわれたキリスト教の小さな教会、もしくは礼拝堂のことで、グアダルーペの聖母出現前のことである。

私がこの村を訪れた日、教会前に人が集まっていた。何度かこの地を訪ねているが人に出会うことなど滅多に無いこの村でのことである。その人だかりの中心にあるのは花飾りをつけ、白く輝きを放つ真新しい大型トラックで、安全祈願、商売繁盛のために白装束に身を包んだ牧師がその



車の安全祈願はメキシコでも

彼の仕事に関係している人達なのか。はたまた、集団農場メンバーの家族なのか。でもこの小さな村の大きなニュースであることには違いない。それに乗じてのことなのかはわからないが、観光客相手の紙人形の店が出ていた。作者の手先の器用さに驚く。先住民の生活模様をモチーフにしたもので、一つ欲しかったが持って帰ることが難しいので諦めた。



指先の器用さは日本人に負けない

トナンツイントラ対アカテペック：美の執演

ミサの行われないうちは門も教会の扉も閉まったままである（今日では観光客のために毎日開いているようだ）。そんな時間に訪ねると徒労に終わることになる。せいぜい門の鉄格子の間からタラベラのタイルがあしらわれたサンタ・マリア教会を撮影して帰路につくことになる。同じようなデザインに見えるが外観では残念ながらアカテペックにかなわない。

メキシコに通い始めた頃にこの教会を訪ねたことがある。まだメキシコ人でさえ教会美術に関心を示す人が少ない時代のことで、教会を管理しているセニョールに日本からわざわざこの教会を見に来たのと言って同情を誘ったら開けてくれることになったのだった。セニョールは戸口に立つ私を残して灯りを点けに聖具室に消えたが、間もなく堂内に灯りが点された途端、私は仰天してしまった。以前にモノクロームの写真を見てその奇抜さは知っていたつもりだったが、その教会の主祭壇といい、天上、両壁面、背後にある聖歌隊席の天上の極彩色の装飾は、



複雑な装飾の円ドーム

「なんだあ？これは！」と思わず叫びたくなるものだった。それをメキシコはプエブラ州のこの田舎で見ることになるとは全く想像もつかなかったのだ。宗教上のモチーフを除外視すれば、色彩の密林に迷い込んだのだという錯覚さえ憶えた。細々とした装



主祭壇と信者席を分ける凱旋門



凱旋門（部分）

飾の集合体は、それだけでもわびさびに慣れ親しんでいる日本人の私には違和感を憶えるが、さらにそれを助長しているのは漆喰で形成された深いレリーフである。支持体の壁までの厚さ、あるいは深さは15cmはあろうかというもので、それがまた小さい教会の全容積をさらに小さくして、私を圧迫しているのだ。それは前回紹介したアカテペックのフランシスコ教会のレリーフの厚さを越えている。さらに前々回紹介したプエブラのサントドミンゴ修道院ロサリオ礼拝堂に匹敵する厚さである。

しばらくして、私が感じた圧迫感はそのような物理的なものでないことに私は気がついた。それは堂内に配置された多くの聖人像や褐色の肌をした天使像の他、空間を飛び交う無数のケルビム（智天使）の視線が、すべて私に向けられていると感じたことによるものだった。こうした私のような考えは信者でも無い異邦人の陥る浅慮かもしれない。おそらく信者にとっては多くの歓喜と祝福の視線と感じているに違いない。でもその時の私は、恐れにも似た感情にさいなまれていた。



教会入り口上の聖歌隊席

さて、プエブラ地域で見られる隙間恐怖とも思えるこうした17、18世紀の教会堂がどのような経緯でデザインされたものか考えてみたい。前述した二つとこのトナンツィントラの教会堂の共通点はほぼ同時代に建設されているから、設計者が同じかそれに影響を受けた人物であった可能性は十分にある。時はメキシコ経済が順調で、合わせてキリスト教が先住民に十分吸収されていた時代だった。そうした背景が芸術へ影響を与えることになり、メキシカン・バロックの芸術を生み出す切っ掛けになったのだと思う。プエブラでは金箔をふんだんに使用して黄金



入り口から主祭壇を眺める

の空間のロサリオ礼拝堂が完成した。メキシカン・バロックと言いつつも、何処か洗煉されたヨーロッパ風の空間になっている。

前回紹介したアカテペックの金箔を多用したフランシスコ教会は、全体の壁の色を黄金に近い黄色で覆っていて、先のロサリオ礼拝堂に倣おうとした意図が感じられる。でも残念ながらロサリオ礼拝堂には及ばなかった。資金が少なかったのだと思う。さらに聖像や天使像、植物模様のレリーフが比較的浅く、陰影が作りだす量感が乏しい印象を与えている。バロックの作品でありながら、よく言えば洗煉されて上品な空間を造り上げていた。



天蓋の下のサンタマリア像

一方、トナンツィントラのサンタ・マリア教会は、同時代の芸術作品でありながらきわめて土臭い作品である。それがバロコ・ポブラーノ（田舎風バロック）と呼ばれている所以である。漆喰の聖人像や天使像の表面に滑らかさが見られず、慣れない手つきでコテをふるった手作り感がある。また聖人像や天使の顔や衣装、植物などのモチーフを金箔でなぞっているのだが、その余白に地色の白、赤、黄緑、橙、青ですこし乱暴に見えるタッチの彩色が施されている。隙間を排したこうした空間に違和感を憶えていた私は、稚拙な仕上がりであるにもかかわらず、不思議な魅力を感じはじめていた。それは明かり採りの窓から差し込む光が聖像や天使像、そして植物模様にやさしい陰を造り、複雑な色彩のトーンを醸し出しているのだと気がついたからだった。

プエブラ市のロサリオ礼拝堂の豪華な空間に比べて、小さな二つの村の教会の美の競演を支えることになったのは、残念ながら、先住民の血をひく村人が資金を出し合って成し遂げた可能性はない。彼らは日の昇る時間にアシエンダ（荘園）の畑に出て、

日の落ちる時間にねぐらに帰る毎日を繰り返していた。彼らは休日、キリスト教徒のつとめとしてこの教会建設に手弁当で参加していたかもしれない。



天蓋の上の大天使



果物の舌を出す奇人？

このトナンツイントラのバロックの教会を資金面で支えたのは、今日、豪華な建物を再利用してイベント会場となっている近所のロス・レイエスというアシエンダの当時のオーナーだったと私は想像している。それは彼らファミリーの永代供養のためだった。トナンツイントラ村は先のアシエンダに雇われていた、あるいは囲われていた労働者の集落だったと私は強く思う。

堂内の多くの褐色の天使の表情には、この時代に下層に運命づけられた先住民たちの希望と祈りが込められている。それがバロコ・ポブラーノと言う芸術を生み出したのだ。 **【連載その16完】**

【編集部注:阿部修二会員には「ぶらりメキシコ一人旅」と題してメキシコあちこちを訪ね歩いた随想を2022年1月号の第1回を嚆矢に投稿いただき、今号で第16回となります。

ご参考までに第11回からの訪問地(タイトル)を掲載します。

- 第11回: サン・フアン・デル・リオ
- 第12回: アコルマンとテオティワカンと
- 第13回: 偽ケツツアルコアトル神と古都 Cholula
- 第14回: プエブラ(ロ)＝村という大都市
- 第15回: おとぎの国、アカテペック
- 第16回: なんだぁ！これは？のトナンツイントラ

阿部さんは2005年よりアミーゴ会会員。1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒及び桑沢デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』(2021年9月刊 明石書店)です。

《写真転載不可》

なお、掲載写真の細部をご覧になりたいときにはPC画面で拡大してお楽しみください。]



凱旋門上部三角部の聖人像



側壁上部の聖人像

名誉会長・上原尚剛さんを偲んで

メキシコ・日本アミーゴ会の名誉会長上原尚剛さんは本年7月4日未明、薬石効なく永眠されました。享年89歳。ご葬儀は7月28日に鎌倉で家族葬として営まれ、本会は献花を行いました。ご令室からは供花への謝辞と50日祭執行の報告を頂戴しました。上原名誉会長は2019年3月まで15年にわたり第2代会長として本会の興隆にご尽力を戴き、日本とメキシコの親善交流の拡大深化にご貢献されました。ここにご冥福をお祈り申し上げ謹んでお悔やみを申し上げます。

故人を偲んで思い出をお寄せ戴きましたのでご紹介します。合掌。(編集人)



(本誌 2018 年 1 月号より転載)

上原尚剛さんを偲んで

千葉県御宿町 黒沼俊子

「上原さん長い間たいへんお世話になりました」とまず感謝の言葉から始めたいと思います。

このようなお気持ちの方がどれほど多くいらっしゃるかということをお願いすることは、まさに上原さんの人徳そのものです。私が最初に上原さんをお見かけしたのは、北区西ヶ原にあった東京外国語大学のキャンパスにあったテニスコートでした。湘南ボーイの上原さんが楽しそうにテニスをなさっていました。学部が違ったので、お話する機会がなかったのですが、卒業後にメキシコで偶然お会いすることができたのです。

もう何年も前のことになりますか、私が年末年始の休みで、メキシコ在住の妹・黒沼ユリ子を訪ねたときに、上原さんが三菱商事の駐在で、当時スペイン語科の仲間3人もメキシコに駐在しており、皆さんと一緒に私たち姉妹と妹の息子をご自宅に招いてくださいました。それ以来ずっと何かとお世話になっておりながらご無沙汰していますうちの突然の訃報を残念に思うばかりです。

上原さんは黒沼ユリ子がメキシコとの交流に尽力していることを深くご理解くださり、1985年の春にアカデミア・ユリコ・クロヌマの生徒12人が初来日して日本各地で友好コンサートをした時から始まり、メキシコ人が団伊玖磨のオペラ「夕鶴」をオリジナルの日本語で歌うという世界初の公演を日本でも実現した時、2010年にメキシコの一流アーティストを招いて紀尾井ホールで行った「メキシコ音楽祭」など枚挙にいとまがないほど、貴重なイベントの実現に協力してくださいました。さらに9年前に私たち姉妹が千葉県の御宿町に移住し、「黒沼ユリ子のヴァイオリンの家」「日本メキシコ友好の家」をオープンした時ににも、逗子からすぐ駆けつけてくださいました。

上原さん、本当にありがとうございました。安らかにお眠りください。

最後になりますが、ご遺族の皆さまに心よりお悔みを申し上げます。合掌。

(9月30日記)

上原氏の思い出

元日本航空(JAL)メキシコ支店勤務
現アカブルコ在住 西 東亜子

多分1970年代の中頃か、もうすでに後半に入っていたかもしれない時の事です。私は現在日本大使館のある Paseo de la Reforma 243 番にあるオフィス用雑居ビルの1階で働いていました。そのビルは1階と8階に日本航空、2階にアメリカの航空会社のウェスタン航空、3階に三菱商事さん、9階にビルのオーナーさん用ペントハウスという複合ビルでした。

丁度 JAL のヴァンクーヴァー経由の B747 のフライトも軌道に乗ってカウンター業務も忙しい時代でした。

あるとき一人の颯爽としたハンサムな若中年の紳士がオフィスに入っていて、同僚の一人とお話して出て行かれました。

フライトか何かのお話してみたいでしたが、物知り

の一人が「あの方が三菱商事の支店長の上原さんよ」と教えてくれました。なんて素敵な紳士、と5人いたメキシコ人のスタッフも日本人のスタッフもため息をつきました。それから時々お昼どきに上原氏が同僚の方達とランチをするのにレフォルマ通りを横切るのをお見受けしました。いつも私達の憧れの的でした。

あれから長い時が流れ上原氏の帰天のお知らせを受けて若かった時の何コマを懐しく思い出しました。安らかにお休み下さい。

Que descanse en paz.

(9月30日記)

注：筆者の西さんは嘗て JAL メキシコ支店で発券業務を担当されていたとか。本稿は遠藤メキシコ代表のお世話で実現しました。

上原さん…哀悼痛惜

メキシコ・日本アミーゴ会
メキシコ代表 遠藤滋哉

先の7月24日、アミーゴ会幹事の森和重さんから前会長の上原尚剛さんの訃報がありました。お元気でいらした上原さんが!?!…。哀惜、悼念の想いを禁じ得ませんでした。

私とアミーゴ会とのご縁は2009年に上原尚剛前会長から、「御宿友好親善訪墨団」がメキシコ独立200年記念祭に訪MEX.される際に、委嘱を受けて現地「メキシコ代表」に任命されました。その役目は、当時のフェリペ・カルデロン大統領から赤坂迎賓館に於いてのメキシコ独立200周年・革命100周年の記念祭に招待を受けた御宿町の方々の、答礼メキシコ訪問使節団の受入れお世話係りです。

上原さんには半世紀を超えてご親交をいただきました。私は今年7月28日でメヒコ在住54年目を迎えます。当時まだオフ・ライン（自社の便が飛ばない）だった日本航空支店のビル2F（日本風では3階）に三菱商事のメキシコ支社がありました。私は貧ボウ留学生で、隣の（一当時“淫風荘”と揶揄して呼ばれた薄汚れたビルの）安い下宿からINBA（国立芸術院）の民芸美術学校に通っていました。

この日は授業が遅い実習に出かける前、窓を開けると斜め上の窓から（タバコを吸っておられたか？定かではありませんが、“忙中閑あり”だったのでしょうか…？）上原さんが「オお〜い、昼めし食ったか？これから出るから行こう！」と声をかけてくださって、近くでComida（定食）をご馳走になりま

した。今から思うと超多忙な企業戦士の商社マンがイチ貧乏学生にメシを奢ってくれる、夢のような時間と空間でした。

その後「メキシコ観光（株）」で働いていた時期にも仕事面でご最良をいただきました。

メキシコに進出するにあたり、電力庁（CFE=Comision Federal de Electricidad）への日本プラント売り込みに苦労されました。「Mordida=袖の下」を使えない日本の企業は中国、韓国に水をあけられます。上原さんはCFE幹部の奥様やご家族の誕生日を克明に記憶してプレゼントを贈ります。そこから親密な関係を築かれたご苦労話をお聞きしました。

アミーゴ会初代会長の利光松男さんの後の会長になられてからも篤いご厚誼をいただきました。帰国した機会に何度か逗子のご自宅近くのイタリア・レストランでワインと料理をご馳走になりました。とくに思い出深いのは日本画家だった亡父の「遠藤桑珠・生誕100年記念展」に祥子夫人とわざわざ米沢（上杉博物館）まで観に来てくださった事です。この時の感想を「アミーゴ会だより第32号（2017年10月号）」ご寄稿いただきました。

☆URL: https://docs.mex-jpn-amigo.org/AmigoNews_1710.pdf

上原さんは将に日本とメヒコの架け橋＝「メヒコの電力を造った男＝快男児」です。

はるかにご冥福、ご浄福をお祈りします。合掌。

（10月1日記）

上原さんを偲ぶ

メキシコ・日本アミーゴ会
幹事 笠井道彦

それは、1984年10月のある日でした。丸の内の事務所の自分の席に着いていると、社内の偉いさんと思しき方が近づき、「君が笠井君か？」と声を掛けられたのでした。それが当時、メキシコ三菱商事会社の社長だった上原さんに初めてお会いした瞬間だったのです。当時、小生は前任地ベネズエラの首都ではない田舎での5年間の駐在から戻り、約1年がそろそろ経とうかというところで、次の赴任のことで人狩りがあるなど全く考えていなかった頃でした。

その後、メキシコへの赴任が正式に決まり、年明け4月にも赴任せよとの辞令が出されたのですが、偶々当時担当していた他の南米地域の古い案件で、税務調査を受けその対応に当たる毎日で忙しく、3か月、4か月と赴任を先延ばししていたところ、85年9月にメキシコで大地震が発生。大変な被害が出たことが毎日報じられることとなりました。

小生としては、税務調査のお陰で大地震の被害を逃れることが出来たことに驚き、幸運だったと認識

したことと、大勢の被害者に対し申し訳ない思いを噛みしめた記憶があります。実際に赴任をして見ると、メキシコ・シテイは本当に大都会で大きく、料理も美味です。2,000メートル越えの高地ゆえに制度化された年3週間の高地特別休暇も相まって、家族連れであちこちの海やリゾート地での休暇を楽しみ、印象深く素晴らしい思い出ばかりです。

メキシコでは、広大な社長社宅で折に触れ又毎シーズン、家族連れでのパーティ、焼き肉、それに広いお庭でのピニャータ割りなどが行われ、子供連れの家族にも大変楽しく、上原さんご一家には一方ならずお世話になりました。当時は、駐在員が10名以上も居たこと、その他関係会社への数名の出向赴任者も含め、常に多くの社員の皆さんらも含め、楽しく過ごすことが出来ました。今は、会社のシステムが大きく変わり海外駐在員が殆ど居ないとのお話を伺いますと、我々の時代は良かったのだなと実感致します。

それに、加えて上原さんから、赴任後早くに現地に滞在されていた南郷さん<現アミーゴ会幹事・監査役>を紹介され、メキシコで展開されて居られた自動車のミラー工場に伺い、上原さんからのご指示もあり、南郷さんと何度か北米デトロイトなどに出張し製品の売込みを一緒に行ったことなども思い出深いことです。

小生はその後、5年間の赴任を終えて本邦に戻りますと、上原さんは本社で機械グループの人事担当役員をされて居られ、直ぐに専務取締役としてグループの重鎮のみならず、会社全体の経営に携わられました。その後小生は重機部という前からの部署で南米担当リーダーを命ぜられ、主に南米地域でのプロジェクトに従事して居りました。その後機会があり小生が唯一地域外で担当し受注したサウジアラビアでのセメントプロジェクトで、1995年春にセメント工場一式（発電・造水・一部住宅の建設を含む）の契約式があり、本社代表として上原さんが見えになった時は事前の打ち合わせも殆どありませんでしたが、当日上原さんが見えて署名式にご参加頂き、驚き且つ喜びを感じました。

このプロジェクトは、建設前に地下に鍾乳洞が発見されたこと、客とこの追加費用をどうするか等の争いが長く続き、加えて下請けで起用した韓国土建会社との係争、その後のコンソーシアムを組んだメーカーとの係争、英国でのエンジニアリング会社の設立・終了などなど、文字通り曰く付きの10年を超える大仕事となりました。実に従来への知見の及ばぬ新たな経験と共に、プロジェクト後も、退職後まで長く時間の掛かるプロジェクトになりました。

現地のサウジでは、タブーク・セメントと言えは現在最高の利益を生む大きな事業として有名ですが、実行中には実に悩み且つ呻吟を重ねたと同時に、東京でのリーダー職を打ち捨て現地に乗り込まざるを得ない状況と相いりました。

そして、小生が商事会社を退職しその後約10年、スペイン、アルゼンチンなど仕事で海外を転々としてきましたが、最後の仕事である米国での仕事を離れて、2009年春に日本に戻り、暫くは仕事もありませんと上原さんにご報告をすると直ぐに、アミーゴ会の事務局を手伝って欲しいとの連絡を頂き、当時の関口事務局長から事務の引継ぎを受けることとなりました。

それから、14年間も事務局長を務め、その殆どは、上原さんが会長として居られ、種々指示を頂きアミーゴ会も恙なく発展して参りました。会員数も一時は300名を超える盛況でした。その後もほんの3年程前まで南郷さんを含めゴルフなどにも親しくお付き合いさせて頂きましたが、最後まで上原さんはスコアに拘られ、同組のプレイヤーの調子の良い時には、プレーをする人の斜め後ろに立たれじつとボールの行方を見て居られたことを思い出します。

上原さんとは本当に、商事会社を離れてからも親しくさせて頂き、時にはメキシコ代表の遠藤さんの

お父上の山形、米沢市での個展にもご一緒し、上杉神社にもお参りし、山形牛のお昼も頂きました。

その後、2023年末になり、突然小生の脳に小さなトラブルが発見され、小生は24年春に旧知の吉野さんに事務局長をお願いすることとなりました。その際小生の病状を説明しましたが、上原さんは「そんな病気があるのか？」と驚かれました。その数年前に上原さんの食道に腫瘍が見つかり、心配して居りました。自宅の近い南郷さんからその時々の容態を伺い、一喜一憂して居りました。この春には車の運転も再開されたと聞き、少し安心をして居りました。奥様の具合が良く無いと伺い、7月にもマンゴをお送りしたところ、奥様から女房にお電話を頂いたのが、突然の訃報の1週間程前で、上原さんは未だ大丈夫だなどと考えて居たところでした。

本当に残念なことでした。合掌。

(10月4日記)

メキシコ短信

黒沼ユリ子さんの平和の絵本 メキシコの子供たちに届く

黒沼ユリ子会員の平和の絵本3部作がスペイン語とチワワ州山岳民族のことばララムリ語に翻訳され、黒沼さん自ら各2千冊を届けてくれました。黒沼さんは自らの東京空襲体験を大人



ではなく、子供たちと共有して平和構築に活かしたいと平和の絵本を著し、小学時代の恩師の絵とともに平和の大切さを訴えています。翻訳は友人のメキシコ人平和運動家レニー・サリーナスさんの協力を得てララムリ語にも翻訳されました。

黒沼さんはいま、10月20日に再度渡墨し、1カ月程チワワで平和教育担当教師を指導したり、ヴァイオリンを子供たちに教えたりしているとのこと。また、近く3冊の平和の絵本を原作とするミュージカルの制作発表会があるとのこと（姉の俊子さん談。写真2葉も提供）。

☆平和の絵本3部作：『ゆびのこと、しってる?』『あめさん、おみずさん、ありがと〜』『あるき・にすと? アルピニスト?』（富山房インターナショナル刊）。

あとがき：灼熱の日々の後は行き成り晩秋か初冬の風情に。落ち葉は絨毯。虫の声は喧噪。でも学者は日本の四季はやがて二季になるとのご託宣。ホンマカイナ? 知識と智慧を集め四季折々の変化をいつまでもどこでも楽しみたいものです。今度は「G2」が地球を牛耳る心積もりか。人間社会を分断し人類を滅亡させるが如き大国の指導者たちの振る舞いを停止するのは私たち一人一人の力強い抗議のコブシだけです。故上原尚剛名誉会長との思い出を寄せて戴きました。故人の多面性が活写されています。秋の叙勲受章者(旭日双光章)に早瀬英夫・元日墨協会長のお名前。本誌発行も漸く1ヶ月遅れまで回復。会員の更なる協力を期待します。[20251103 か]